2024 年　4 月 13 日　フランス語学会　定会
於　京都大学吉田南総合館南棟 334 演習室

フランス語一人称小説における現在形の意義にまつわる事例研究
-le diable au corps を題材として-

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
博士課程 1 年　髙久真由美

要旨
Le diable au corps (以下、『肉体の悪魔』)は 1923 年に Raymond Radiguet(1903-1923)よって書かれた、1902 年から 1919 までの青年の体験を記した一人称小説である。作中、頻度は少ないながらも現在形の使用例が散見される。物語を過去形の動詞を用いて記述することは一般的であるため、使用が比較的稀な現在形に焦点を絞り、当該テクストにおいて現在形がどんな役割を担い、いかなる効果が生み出されているのか検討し、現在形の表現可能性について吟味する。結論として、『肉体の悪魔』において現在形を用いることで、以下の①-④の効果が生じていることが確認された。

① 語り手<je>と登場人物としての<je>の思考を接近・統合させている
② 語り手<je>と登場人物としての<je>の認知(視覚や聴覚, 時間感覚など)を接近・統合させている
③ 主語を不定代名詞や形式主語, 普通名詞とすることで登場人物としての<je>の私的な体験を基盤としながらも総称文にしている
④ 語り手の現在に近づくにつれて頻度を増やすことで語りの現在と物語世界の時間を統合している

これらの効果により、『肉体の悪魔』における現在形の使用は、複雑で長期的なシナリオにまとまりを与え、物語の統一性に寄与する効果があると考えられる。さらに、テクスト全体の構造が現在形の意味の決定にかかわる可能性が示された。